

『東方』二九八号より

中国語教学文法の歴史と現状、 そして今後の展開

杉村博文(大阪外国語大学)

鳥井克之先生(関西大学外国語教育研究機構教授)が、中国語教学文法(Pedagogical Grammar) 或は School Grammar) の研究に大きな情熱を注いでこられたことは、早くから斯界の知るところであり、先生の多年にわたるご努力が本書として結実したことを心からお慶びしたい。小論は書評と銘打ってはいるものの、実際のところ、一若輩のないものねだりの紹介にすぎず、そのようにお読みいただければと願う。

さて、筆者の本書に対する偽らざる読後感は、もし鳥井先生のお仕事に関して先行知識のない読者が、中国語教学文法に関して悩みを抱え、問題解決への期待をもつてこの本を手にした場合、おそらく小さからぬ違和感を覚えるのではないだろうか、というものである。その辺りを中心に話を進めてみたい。

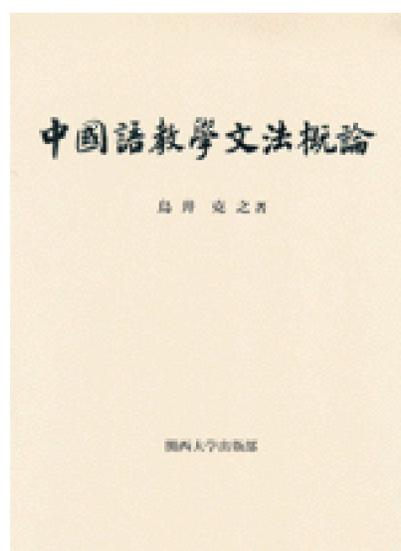
本書は第一部「基本的文法文献の解題と評論」、第二部「新しい中国語教学文法の再構築を目指して」から成る。この二つの標題は「中国語教学文法概論」という書名と素直にリンクする。しかしながら、第一部で紹介される文献に「教学文法」基本文献と呼べるものは少ない。しかも、紹介の対象は『馬氏文通』(二八九八)以前に出た、天理図書館所蔵歐文中国語文法書から始まり、朱德熙『語法講義』(二九八一)までであり、且つ『馬氏文通』以降の著作は、趙元任の『MANDARIN PRIMER』(一九四八)を除くと、

▶ トップページにもどる

鳥井克之著

『中国語教学文法概論』

A5判・七一〇頁・関西大学出版部・六、八二五円



すべて中国大陸で出版され、中国人を読者に想定して書かれたものである。著者からすれば、教学文法の成立発展にとつて基本的と見なし得る文献はこれで網羅されているのであろうが、時代をもう少し現代に近づけ、中国大陸以外の研究にも目を向けるべきではなかったかという疑問が残る。例えば、趙元任『A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE』(二九六八)、呂叔湘『漢語語法分析問題』(一九七九)、Charles N. Li & Sandra A. Thompson 『Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar』(一九八一)、劉月華等『实用現代漢語語法』(一九八三)、李英哲等『实用漢語参考語法』(一九九〇)などが評論の選から漏れている。ちなみに後二者のタイトルに含まれた「实用」は「学習のための」という意味であり、教学文法に近い。著者は、「基本的文法文献の解題と評論」を「教学文法概論」の第一部に据えた理由を「あとがき」の中で次のように述べる。

新しいものを築くためには「温故知新」の態度が必要である。そのため、これまでの中国語文法研究の成果を知る必要がある。そこで旧著『中国語文法史』第一部「基本的文法文献の解題と評論」を活用した。

文中『中国語文法史』は著者の博士學位論文で、一九九五年に関西大学出版部より刊行されている。

著者は本書執筆の目的を「二一世紀に通用する新しい中国語教学文法を構築するためのガイドラインを具体的に提示する」ことであるとする。この目的と「基本的文法文献」を併せ考えたとき、読者はおそらく、それが誰のための、なにを旨とした教学文法であるのかが読み取れず、当惑するはずである。素直に読めば、本書は、中国人の教師が中国の教室で中国人の学生を相手に中国語の文の成り立ちを解説するためのものであると読め、「基本的文法文献」に古代漢語を記述対象とした文献が含まれていることに留意しておきたい）、そのような教学文法を構築することによって、世界のどの国にあつても、どのような教授者、学習者にとつても役立つものとなることを旨としたものと理解される。しかし評者は、さまざまに異なる教授者と学習者が想定され、学習の効率と効果が優先される教学文法にとつて、使用者を特定しない方針は実際の教学に不利に働くのではないかという懸念を抱く。ただ、中国のみならずわが国においても、「対外」中国語教学に供される文法は、「対内」中国語教学文法の引き写しか、焼き直しにすぎない。この状況に鑑みれば、やはり鳥井先生が意図されるような、汎用的教学文法の構築が望まれているのかもしれない。

第二部「新しい中国語教学文法の再構築を旨して」の内容は、第一部「基本的文法文献の解題と評論」から直接導き出される。例えば第二部第三章では、主語、目的語など

▶ トップページにもどる

統語成分が論じられているが、著者は自らの主張を提示する準備作業として、第一部に挙げた基本的文献におけるそれらの扱いを逐一論評する。主語を例に取れば、馬建忠『馬氏文通』から朱德熙『語法講義』まで、十四種に及ぶ文献の主語に関する定義が述べられ、その上で、それらに対する論評の形をとつて著者の主張が示されている。第二部の構成は以下のようなものである。

- 第一章 中国語の語素・単語
- 第二章 中国語の品詞分類
- 第三章 中国語の統語成分
- 第四章 中国語の句
- 第五章 中国語の単文
- 第六章 中国語の複文
- 第七章 中国語の構文分析法

本書は、基本的には、構造言語学的手法によつて現代中国語文法の枠組みを提示した朱德熙『語法講義』の思想と体系を、微調整の上、教学文法として再提起したものと考えてよいが、注目されるのは、第一章と第二章に他を圧して多い字数が費やされていることである。文法を体系的に整理する場合、最も一般的な方法は、語素から語へ、語から句へ、句から文へというように、小さな単位から大きな単位へと順次組み上げてゆき、最終的に文に到る方法である。これは、非連続要素の組み合わせによつて無限の創造性を獲得する言語システムの特質(二重分節)を反映したもので、自然科学が一般的に用いる方法でもあり、方法論的には成功が約束されている。よつて、最も基本的な単位である語素と、その直接の構成物である語に多くの紙面が

費やされるのも理解に難くはない。危言的もの言いをするば、語素から始め、語の構成様式と文法機能までを論じ切れば、中国語の文法の半分は論じ終わったも同然である、となろうか。

第七章の「構文分析法」は、教学文法に直接構成要素分析の導入を提唱するものである。直接構成素という概念は、文が物理的にはチェーン状に産出されるにも関わらず、実際はツリー状に組織されていることを反映するものである。文はツリーの中にツリーを含む再帰的構造(recursive structure)を成すことにより、単純な同一手段の繰り返しでいくらかでも大きな構造体を組み上げることが可能になる。再帰的構造という用語は、本来プログラミングの用語であり、ここに自然言語と情報工学の接点が見い出され、直接構成素という文法手段の形式的効率性を支持する。ただし、「構文分析法」という表現は正確ではない。これは「析句方法」という中国語の翻訳であるが、「析句」は「文の分析」であって「構文の分析」ではない。そもそも、文を非連続要素の再帰的組み合わせからなる構造として捉える分析において、文を作りあげる操作を言う概念としてならいざ知らず、できあがった構造物を特に指して言う概念は、理論上、無用となるはずである。

繰り返しになるが、著者が本書を執筆した目的は、「二一世紀に通用する新しい中国語教学文法を構築するためのガイドラインを具体的に提示する」ことにあり、著者は多くの先行文法体系の中から朱徳熙『語法講義』を範とし、きわめて詳細なガイドラインを書き上げた。このガイドラインに沿って、今後、具体的にどのような中国語教学文法が構築されるか、期待をもって見守りたい。その際のキーは、私見では、教学文法とは一体なにを目指す文法であるの

▶ トップページにもどる

か、その目指すものの実現に教学文法はどう関わってゆくのか、その辺りの思索を周到にめぐらすことにある。言語という情報伝達システムの工学的性質や認知的性質を提示し、学生の分析能力を養成する。言語に対する規範意識を涵養したり、論理的表現作法を訓練する。現代中国語の類型論的特徴を提示し、言語のデザインの可能性と制限を考えさせる。中国語学習者に提供し、より効果的に中国語を学ばせる。……

試みに、より効果的に中国語を学ばせる教学文法というものを考えてみよう。そうすると、皮肉なことに気づく。ボトムアップ式に小から大へと構造をビルドアップしてゆく文法は、大から小へと構造を解析する(文を理解する)ことには役立つが、小から大へと構造を組み上げていく(文を造る)ことにはほとんど役立たないのである。少なくとも我々に内省可能なレベルでは役に立っていない。それゆえに教室では、分析理解のために「講読」が、生成伝達のために「暗誦」が、絶えることなく繰り返されてきたのである。今、我々がなすべき作業は、そういう教学体験の科学的裏づけと、それを活かした教学文法の構築であるとは考えられないだろうか。

鳥井先生の『中国語教学文法概論』は、中国語教学文法の歴史と現状を知る上で極めて有益であり、中国語教育に従事する者にとって教えられるところの多い労作であるが、将来への展望には課題を残す。これを結語とし、先生のご叱正を待ちたい。